君の歌は僕の歌

森下 加夜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の歌は僕の歌

【Ｎコード】
Ｎ２７０２Ｆ

【作者名】
森下　加夜子

【あらすじ】
２ＸＸＸ年、ソフトウェアとしてのブームがすっかりなりを潜めたころ。
歌唱部分にソフトウェアの技術を流用したアンドロイドとして新しくボーカロイドが作りなおされていた。
ＶＯＣＡＬＯＩＤとその周辺をモチーフや下敷きにして書いていますが、
実際の企業や各一次創作者とは関係ありません。

track　001　［OVERTURE］

都会の雑踏。
物音、足音、囁き、呟き、それらの残響。
ノイズまみれの環境は私にとってはかなりのストレッサーだった。

ニットキャップで隠したインカムは、そのために受信状況がやや悪く、入信を聞き漏らさないように集中すると、今度はそのノイズが私を苛んだ。時計は入信の予定時刻がとうに過ぎたことを知らせてくる。苛立ちや不安もまた、私を追い込む。
「大丈夫、焦るのはまだ早いよ」
隣の相方には、私の状態が筒抜けだったようだ。
「でも、もう予定時刻から18万ミリセコンドも経過してる」
「たったの3分だよ」
いつのまにか握られていた手から伝わる脈で、やっと少し落ち着けた。2人、道の脇で寄り添いながら流れていく人ごみを眺めながら待つ。
季節は冬。マフラー、コート、クリスマスキャロル。浮き足立つ時期に街は他の季節より騒がしい。耳に障る。伝わる脈と自分の心音を重ねて暫く、やっとインカムが小さな電子音を発した。私たち2人以外の誰もが気づかない高周波音。目配せして、帽子を直すフリをしながら応答ボタンを押した。誰にも気づかれないようにこちらから音声で応答することは禁じられている。
『準備はいいかい？良いなら2回、だめなら1回だ』
あれだけ待ったのだ、良いに決まってる。すぐに応答ボタンを2回押した。
『よし、じゃあそこから大通りに抜けて、スクランブル交差点からスタートだ。打ち合わせの通り、頼んだよ』
返事の代わりにボタンを2回。

繋いでた手は解いて、代わりに腕を絡ませる。これで私たちは恋人同士に見えるらしい。

「行きましょう」

雑踏はまだ私を苛むけれど、この触れ合いは偽りだけど、ぬくもりと規則正しい鼓動は私を癒したのだった。

track 002 ［at Home］

「ただいマスター」
つまらなさすぎるギャグを本気でかます相方に呆れた。こういう時は構うと調子にのるので放置に限る。
「おかえり二人とも」
マスターがひょこっと顔を出す。
「ご飯にする？お風呂にする？それとも……」
嗚呼マスター、それは新妻が使うふるいフレーズで独身男性のマスターが言う台詞じゃないです！
「歌う！」
「じゃあそうしようか」
「やったぁ！」
跳ねるようにして靴を脱ぎ散らかして奥へ向かう相方とそれをのんびり追いかけるマスター。
相方の靴を直しながらとてもやるせない気持ちになった。
普段はスーツに白衣なのに、家ではよれたトレーナーにジャージ。口からでる言葉はしょーもないことばかり。この状態のマスターを見て、誰があの人をロボット工学の権威と思うだろうか。彼に作られた私ですら思わない。自分を創った技術が確かなものであることは身をもって感じているが、とても素直に認められはしない。それもこれもあのおちゃらけた日ごろの態度のせいで。
「めーちゃん、歌はー？」
下る階段から顔を出す相方、カイトの声でふと我に返る。
「行く！すぐ行くから！」
自分のパンプスを脱いで帽子もコートもそのままに地下の防音室に続く階段を駆け下りた。
マスターの家は広い。だからその地下も随分広い。そしてその地下の全てに防音処理がされていて、スタジオや研究室や作業所が全

部放り込まれている。
　スタジオの横には機材庫と雑誌や楽譜、各種音源を保管するライブラリーが併設されていて、私たちにも自由な出入りが許されている。
　スタジオの奥に作業所、その更に奥に研究室が置かれていて、こちらはマスターの許可なしでは入れない。作業所にはメンテナンスで入ることが度々あったけれど、研究室には入れて貰ったことがない。一番最初、産み出された場所がそこらしいが、その時の記憶には管理者権限でロックがかけられている。先に生まれた私がそうだから、多分カイトもそうなのだろう。

　スタジオではもうブースでスタンバイしているカイトとコントロールルームで機材を弄るマスターがいた。慌ててブースのドアに手を掛ける。
「メイコ、帽子とコートを脱ぎなさい。慌てなくていいから。」
　マスターに言われて頭が冷えた。自分の慌てっぷりに少し恥ずかしくなりながらちゃんと準備をして、マイクの前に立った。
「マスター。スタンバイ完了です」
『二人とも、今日の実験はどうだった？』
　防音壁とガラスの向こうから機材を通して聞こえてくるマスターの声は少しくもって聞こえる。
「楽しかったですよ」
　今日の外出の目的はマスター曰くボーカロイドである私たちがいかに人ごみに紛れられか、がメインであとは私たちが歩きながら町に流れるクリスマスソングに合わせて歌って、どれだけの人が気が付くかという実験も兼ねられた物らしい。私はどちらの検証にもあまり意義を感じなかったけれど、ボーカロイドにとってどんな形であれ歌うことが楽しくないなんて、ありえない。隣でうなづくカイトを見て、余計にそう思う。

「マスター、それにですよ、めーちゃんはやっぱり歌が上手です！沢山の人がめーちゃんに振り向いたんですよ！」
　ああもう、よくもそんな照れることを何のてらいもなく言えるわね。
　生まれたのが私より遅いカイトは幼い子供のように素直に物を言う。それを少し羨ましいと思う私はずいぶん精神年齢を重ねてしまった気がする。
『だってよ、メイコ。よかったな』
「私のほうが先に生まれて、多く訓練を受けただけです」
『素直じゃないなぁ』
　一人心の中で不満を吐露する。
『まあそんな素直になれないメイコも好きだが』
「なっ！」
『なぁ、カイト？』
　突然の振りにびっくりして隣を見ると、またカイトが頷いているのがよく見えた。
　急に恥ずかしくなって、いたたまれなくなって、気が付いたら私は叫んでた。
「今日はちょっと具合が悪いので部屋で寝てます！」
　本気にして、慌てるカイトを尻目に私はスタジオから飛び出していた。

track 003 ［weak beat］

「マスター、めーちゃんは大丈夫なんでしょうか？」
メイコのとっさの言い訳を真に受けたカイトは本気で心配しているようで、ブースの中でそわそわしている。
「大丈夫、メイコは褒められて恥ずかしがってるだけだよ」
まだ経験の足りないカイトには彼女の機微は理解できないのだろう、怪訝な顔をしている。
「本当に具合が悪かったらあんな風に飛び出せないよ。だから心配しなくてもいい」
「なるほど、そっか、そうですね！」
無邪気に喜ぶ姿はとても微笑ましい。
「マスター？僕、何かおかしいところでもありましたか？」
「僕は笑ってたのかい？」
カイトが神妙に頷く。その様子もどことなくおかしいのだけれども。
「それなら君の様子が微笑ましかったからだよ」
カイトはしばらくフリーズしたみたいに固まって、それから頬に手を当てた。
「……今すごく恥ずかしいです。めーちゃんもこんな気持ちだったんでしょうか？」
「そうかもしれないね、でもそうじゃないかもしれないね」
「もー、はっきりしてくださいよ！」
カイトの愚直とまでいえる素直さは、恐らく経験不足によるものだけでなく、元来設定されていた気性も大きく関わってのものだろう。人としてコミュニケーションを取るためにはかなり不安な部分もあるが、こうして彼がボーカロイドであると知っているのならば生活や会話に不足はない。むしろ子供のような無垢さは僕のような荒んだ人間に対しては癒しですらある。

「僕はメイコじゃないからね、わからないに決まってる」
「なんですかそれー！」
「あはははは、ところでカイト、歌はどうする？メイコが出て行ったから今日はやめとくか？」
「やります」
　文字通り何かのスイッチが入ったのだろう。先ほどまでの子供っぽさはすっかり消えて、まじめな表情でブースを見つめる視線と僕の目がかちあった。
「少しでも沢山指導を受けて、早くめーちゃんに追いつくんです」
「そうか。がんばれ」
　そのまっすぐな向上心がいつかメイコを追い詰める可能性があるなんて、君は欠片も考えないのだろうね。
「じゃあはじめよう、インカムの調子はいいかい？」
「大丈夫です」
「アイ・ディスプレイはどうだい？」
「良好です」
　歌唱指導はボーカロイドのソフトウェア時代の音源や調律資料を参考に、当時の自動調声システムに学習機能をつけ、これの自律を目標に行う。参考になるデータが多いほど自然な歌唱ができるようになる。そして僕は一度の歌唱指導につき一曲ずつのデータしか与えていない。メイコが歌唱指導の回数をあげて謙遜したのもそれが理由だ。もっとも、ライブラリーを自主的に除けばデータだけならいくらでも蓄積できるが、当時の製作者たちがなぜこのように表現したのかを学ばなければ本物にはならないと僕は考える。そのためにはたとえ付け焼刃程度の音楽知識しかない僕でも人間が傍にいなくてはいけない。
「いつか本格的に音楽家を呼んでやってみたいね」
「レッスンを、ですか？」
「そうだよ。きっと飛躍的に君たちの能力は向上するんじゃないかな？」

僕ではせいぜい画面に出力音程が楽譜どおりかのチェックとネットで調べた曲の由来の解説、そして大雑把な雰囲気の指示しか出してあげることしかできない。大儀名分には「当時の製作者たちが～」なんてのたまってみたけれど、その真の実現には僕程度の能力ではとても足りないのだ。

「僕はマスターのレッスンが好きですよ」

「ありがとう」

でもね、それが一分の一位に過ぎないことは僕が一番よく分かってる。親として僕は君たちにいろんな経験をしてもらわないといけないと、常日ごろ感じているんだよ。

track　004　［Aufftakt］

与えられた自室に駆け込んで、ドアを背にへたり込む。
「マスターも、カイトも、人をからかって！」
口に出して自分の言葉に違和感を覚える。
「……カイトは天然かしら？」
まがりなりにも私は彼の姉だ。姉として、弟から素直に尊敬されるのは悪いことではないのに。
いずれにせよ、マスターの意地が悪いのは一緒だけれど。
「……レッスン受けそびれちゃった」
あの程度のことで飛び出すんじゃなかった。耳をすませば少々拙いながらも楽しそうに歌うカイトの声が聞こえる。今は私に早く生まれた分のアドバンテージがあるけれど、この調子でいたらあっと言う間に追い抜かれてしまうだろう。彼の素直さは、スポンジの様にたくさんをありのまま吸い込むに違いない。
「こうしちゃいられないわ」
でも地下に戻るのは気が引けるので私室に与えられているパソコンを立ち上げる。レッスン一回には及ばない点もあるけれど、蓄積したデータは多いに越したことはない。質こそライブラリーのものには劣るけれど、量は圧倒的にネットが勝る。マスターの知らないものを知るという背徳感ににたドキドキも少し相まって、立ち上がるまでのタイムラグがもどかしい。
立ち上がりの完了を確認して頭側部のインカムからイヤホンとＵＳＢ端子を引っ張り出して接続する。イヤホン端子は音漏れを防ぎ、音声データのノイズを最小限にして自分で記憶するためだけだが、ＵＳＢでは未だ繊細な動作やディスプレイ越しの認識が苦手な私たちの端末操作を補助してくれる。
「ん、良好」
接続状態は今日も良い。情報の海もあまり機能と様子が変わらな

い。ソフトウェアのボーカロイドを使用した作品は一時期に比べて数こそ減りはしたがありがたいことに未だに使ってくれている人がそれなりにはいる。マスターが見つけて付加情報をつけてライブラリーに入れられる前に新作を見つけるのはちょっとした楽しみだ。

まず自分と同じソフトウェア、メイコが歌唱する新作をさらう。見覚えのあるタイトルが見つかれば、端末使用補助機能のために自然とカーソルが動く。ほとんど無意識のうちに再生が始まった。

何度も聞いたイントロ。これは以前マスターと歌った歌。自律調声だけで良いものが出来たと誉められた歌。それを、私じゃないメイコはどう歌うのだろう。緊張してる、鼓動が少しず早くなってる。

聴こえてきた歌声は……

「えっ？」

track 005 ［Allmahlich sich bernhigen］

「うん、良い感じになったね。今日はここまでにしておこうか」
「はい！ありがとうございました！」
笑顔を見せて出て行くカイトとほぼ入れ替わりに険しい表情のメイコが入ってきた。
「また怖い顔をして……何かあったかい？」
「見ました」
「何を？」
見つかって責められるようなやましいものに心当たりがない。
「私の歌が、公衆の面前に晒されていました」
「ああ、見たのか」
感想は本当にそれだけで、その事実がメイコがここに来た理由として上手く結びつかない。人間とアンドロイドの思考の差なのか、僕の共感が足りないのか。
「なにか中傷でも書かれていたのかい？」
「いいえ、そんなことはありませんでした」
「じゃあ……アップロードされたのが嫌だったのかい？」
「わかりません」
0と1の世界で思考する彼女からそんな言葉が返ってきたのはちょっとした驚きだった。ひょっととしたら、メイコの思考回路は僕が想像するよりはるかに成長をしているのかもしれない。
「そんな怖い顔をして僕に詰めよって来たんだ。嫌だったんじゃないのかい？」
「マスターのされる事が嫌なわけありません」
「でも好ましくは思わなかった。そうだろう？」
「はい、嬉しくはなかったです」
やはりだ。彼女の感情と、アンドロイドとしてあるべき反応との整合が合わなかったのだろう。

「それは嫌だ、ってことじゃないのかい？」
「でもマスターのされる事が嫌なわけありません」
「べつに嫌でもいいんだよ。今は僕が許す」
メイコは数瞬固まってから、おそろしくゆっくりと口を動かした。
「いいん、ですか？」
「うん。僕の目の前にいるメイコはそれでいいんだ」
「じゃあ、それなら、嫌だったんだと思います。マスターが、勝手に、そうしたのが嫌だったんだと思います」
そういうメイコは小動物みたいに縮こまって、恐々僕の様子を伺っている。
「それはすまなかったね。次は君の意見を聞いてからにしよう」
その言葉でさっとメイコの緊張が抜けたのが目に見えてよくわかった。
「今あがってる分は下げたほうがいいかな？」
「いえ、結構です。寄せられたコメントはとても参考になりました」
それは今後のアップロードもメイコの許可さえとれば構わないという意味に取ってもいいのだろうね。
「あの、マスター、何かおかしいことでもありましたか？」
「僕は笑っていたのかい？」
だとしたら、それは純粋な嬉しさからだ。メイコがここまで成長したのがとても嬉しい。倫理と個人の感情の間で揺れるなんてそんな人間らしい現象が彼女に起こっていたのがとても嬉しい。これは親が自分の子供の成長を喜ぶのと同じ感情だろうか。

track 006 ［licenza］

話がひと段落してしまうと、アンドロイドのメイコと人付き合いが得意でないと僕とでは次の話題がでずに少し雰囲気が気まずくなる。よくあることだけれども、僕にはなかなか居心地が悪い。メイコはそう思わないだろう分、余計に。

「あの、マスター……」

だから、メイコがひどく言いにくそうだった言葉であっても発言したのを心のうちでとても感謝した。これもよくあることだ。

「なんだい？」

「さっき飛び出して、受けられなかった分のレッスン……お願いしてもいいですか？」

「ああ、それなら構わないよ」

先ほどまでの流れもあって、メイコがそれを切り出すのを渋っていたことに気がつく。ボーカロイドにとって歌は何にも変えがたいもののはずなのに、僕や成り行きに気を使ってなかなか切り出せなかったというのはとても面白い。

「早く、ブースに入りなさい」

また笑っているだろうことを指摘されるのが嫌で、こういってメイコを急かした。

ブースに入ったメイコと機材の状態チェックを終えると、僕にとって少々悩ましい時間が来る。先ほどカイトとのレッスンで使った曲を使っても構わないのだが、ほぼ休みなく連続というのは少々辛い。かといって新しい曲の準備もない。お互いほぼ初見も悪くはないだろうがそうすると選びかねる。

「メイコ、歌ってみたい曲はないかい？」

「曲、ですか……」

しばらくの躊躇いの後に帰ってきた言葉に驚いた。僕の知らない

タイトルだった。ご丁寧なことに調声用モニターにはメイコのメモリから抽出してきた関連情報まで表示されている。
「私の方が、マスターより先に見つけた曲です」
「……まいったな」
かわいらしい反抗、競争意識、そして優越感。今日は驚かされてばかりだ。いつの間にこのこはこんなに近い場所まで来ていたのだろう。
関連情報を軽く見て回って、予備知識を得る。これまであえて避けて来た他のＭＥＩＫＯが歌った曲。自分の曲が晒され、同じ土俵に上がったことで対抗心が芽生えたのならば僕の軽率な行動もそう悪いことばかりではなかったのだろう。
「あの……駄目でしたか？」
不安げにこちらを見る。そんなわけないのに、その答えに至れないのはこれが初めてのケースだからだろうか。
「メイコがＭＥＩＫＯの曲を歌うのは初めてになるね」
「駄目ですか？」
「構わないよ。準備をするから待っていてくれ」
「はい！」
待ちきれないようにそわそわする仕草も、先ほどの不安げにこちらを見るのも、それぞれのケースに対する標準的な対応として設定したものであるが、今ではそれが生きた反応に見える。やっぱり今日は驚かされてばかりだ。
彼女たちなりの感情表現と意思の理解は、開発者としての僕の記憶と経験則にもたれかかった上で成り立ってきたものと考えてきたが、これはもしかするといけるようになったのかもしれない。
そろそろこのプロジェクトも、次の段階へ進む時期が来たのかもしれない。最も、そのために僕がやるべきことが当面は山積みになっているのだけれども。

track 007 ［zitternd］

私のイメージができない。
記憶が思考を支配して、聞いたものと同じ様にしか歌えない。そうしたいわけじゃないのに。マスターもきっとそれが分かってて、今日は指示も反応も鈍い。今だってガラスの向こうで悩んでる。
「もう一回、やってみよう」
「……はい」
それが間を持たせるための言葉で、次も同じ結果だというのは見えてる。マスターの指示がない限り私の歌声、出力結果は変わらない。ネットで見つけた”ＭＥＩＫＯ”とそっくりそのまま、全部一緒の声。
私はまだ人の成果をなぞることしかできないのだと、思い知らされて辛い。
マスターは参考演奏と出力結果を見比べて相違点を探しているけれど、精度限界による差異の他にそんなものがないのは私が一番わかってる。だけどそうするマスターを止められないのは私がどこかでその差が何かもたらすかもしれないと期待してるから。自分自身の見落としを期待しているから。
そして”ＭＥＩＫＯ”の声を出すのが怖いから。
「メイコ、もう一度頼んでいいかい？」
また駄目だったようだ。
「何回やっても、同じじゃないんでしょうか」
勝手に期待したのに、確率が低いことは私が一番わかってたのに、それでマスターの無駄な仕事までさせてしまって。
「休憩にしよう」
それで尚、裏切られたように感じるなんて。
「君が辛いなら、今日は……この曲は一旦切り上げよう」
嗚呼、私はなんて出来損ないなんだろう。マスターの要求に応え

られないだけでも問題なのに、自分からやりたいと言い出した曲もまともに歌えないなんて、声を出すのが怖いだなんて。ボーカロイド失格だ。

マスターが作ってくださった時はなんでもできたのに、いつの間に、私は、こんな、バグを……

「メイコ！」

ほら、今も。マスターの声だって、まと、もに、拾えな、い……

track 008 ［mezza voce］

強く沈み込む感覚の次に飛び込んできたのは眩しいほどの白。焦点がなかなか合わずその白色の正体がうまくつかめない。ただ、身体を包む柔い感触からあれが天井だと断定した。
「おはよう、めーちゃん。具合は？」
「具合？」
「そうだよ」
カイト曰く、自責回路がオーバーフロー、思考回路が回りも巻き込んでフリーズを起こしたらしい。
「そんなこと……」
アンドロイドのセーフティは厳重に作られている。たかだか思考回路の一部分がオーバーフローした程度で全システムがフリーズだなんて。思考回路の一部分がオーバーフローしたくらいで全体がフリーズだなんて、ただの欠陥ではないか。やっぱり私は……
「めーちゃん、そんな風に考えちゃだめ。またフリーズするよ」
言葉と一緒に思考ノイズが直接混入されて、強制的にタイムアウトさせられた。
「ごめんね、マスターの命令で今は監視させてもらってるんだ」
言われて初めてインカムからケーブルが伸びていることに気がついた。
「ここは？」
「僕の部屋」
どうして私の部屋や作業室ではないのかしら？
「マスターが、女の子の部屋に無断で入るもんじゃないって」
そんなことに気を使うなんて、マスターらしい。
「うん、そうだね」
読まれた？
「思考ケーブルをつないでるから」

ああ、そっか。双方向接続じゃないのね。
「マスターが、今のめーちゃんは少し不安定だから、双方向接続にしたら混乱するって。開放したほうがいい？」
マスターがそういうなら構わない。マスターは？
「今は地下室。めーちゃんのメンテナンスの準備をしてるよ」
やっぱりどこか故障してるのね。
「致命的な障害はないよ。ちゃんと自己修復できてるでしょ？だから、定期メンテナンスの予定を前倒しにして、精密検査も一緒にやるんだって。それから、調声システムと、思考回路の容量増加と、他にもあるみたいだけど僕はこれだけしか聞いてない」
それだけ不具合があれば、私はもう十分だめじゃないの。
「あのね、マスターは誉めてたよ、メイコがどんどん成長してる、って。だからそんな風に考えないで」
分からない。思考暴走した上にフリーズするアンドロイドなんて、どこがいいの？
「僕にもわからない……ごめんね」
カイトの声と共に、思考ノイズと、スリープ命令が送られてきて、私は外部との接続を断たされた。

track 009 ［secco］

その部屋には紙が散乱していた。
床が見えないほど堆積するいつのものか分からないメモの一部は踏みつけられ、もしくはコーヒー色の染みがつけられており、綺麗なものそれだけで新しいものと分かる。書きなぐった紙は次々と放り投げられ、また蓄積し、たまに換気扇や季節に似合わない扇風機が作る風に煽られて無機質な空間を移動する。
部屋の主は机に向かって新しい紙を生産していたかと思うと、唐突に思い立って、席を立ち、必要な内容を呟きながら、紙を検分しつつ掘り返し、暫くたって見つからずに落胆したり、ぶつぶつ言っていた内容とまったく違う趣旨のメモに気をとられたり。また、奇跡的に目当てのものを見つけては狂喜乱舞し、紙に新たな皺をつけたり、撒き散らしたりしていた。
それは決して片付けるための行為ではなく、新たな探し物を始めるごとに彼が床に積もった紙の上でがさごそと極めてアナログな探し物をしてる時間は長くなっていった。
彼のつくった同居人がいくら注意しても、部屋全体でブレインストーミングをしていると言って聞かず、その部屋は荒れていく一方であった。

定時的にカイトが下りてきて、心配そうな声音で体調の如何や軽食の有無を聞き、必要なものがあるときは頼まれたものをもってまたやってきて、扉ごしに話しかけて帰ってゆく。彼は決まって運んできたものは廊下に置いて去り、決して扉は開けなかった。開けるなと命じておいた。
そういうわけだったから、手をけられないまま冷めて回収されていった軽食やコーヒーも少なくなかった。

部屋の主が引きこもりだし、メイコがフリーズしてから一週間が経過しようとしていた。

track 010 ［sotto voce］

めーちゃんは僕がスリープ命令を送ってからずっと眠り続けている。マスターから渡された強制力の強い命令信号を使ったから、僕が起動命令を送るまでは目覚めない。生命維持機能に問題がないのは知っているけれどなかなか離れられないでいる。マスターの言葉のためにめーちゃんがずっと僕の部屋で眠っているせいもある。

起動命令の信号も受け取っているし、僕の判断で使う許可も得ているけれど、めーちゃんの時間は止まってるから、たっぷり一週間も眠ったからといってネガティブ思考の癖は治っていないに違いない。フリーズしてからめーちゃんが受けた処置は生命維持機能の確認と、重大な損害の修復だけだったから、次に自責回路がオーバーフローしたら簡単にフリーズしてしまうに違いない。もっと酷いことになる可能性だって十分ありうる。

僕がずっと思考を読んで、状況に応じてノイズを流して、めーちゃんの管理ができれば問題はないけれど、ボーカロイドにとって思考信号の傍受は不快に感じるようにプログラムされてるから、これは必要がない以上は取りたくない手段にあたる。

定時的にマスターの御用聞きに降りて食事を運び、必要に応じてネット通販で買い物をする。それ以外の時間はめーちゃんの変わらない寝顔を眺めたり、音楽を聴くほかにすることがない。自分が食事を取る必要もないし、思いつくこともない、これといった趣味も設定されていない。

ソフトウェア時代のＫＡＩＴＯにつけられていた多様すぎる設定はまだ知識として持っている程度で、僕のキャラクターとしては持っていない。アイスも嗜みはするけれど、これといって執着はしない。歌はもちろん好きだけど、その背景に不遇だった時代、なんてものはもちろんなくて、あくまでボーカロイドの機能として好きなだけ。

僕が稼動している時はいつもめーちゃんがいたから、誰とも話ができない生活というのははじめてのことだった。
めーちゃんは、僕が作られてる間、こんな寂しい時間をすごしていたのだろうか。
……そうか、これが寂しいって想いなのか。

track 011 ［outer voices］

栄養ドリンクは良い。接種に手間はかからないし、下手な飯より燃費も良い。切れる時はあっさり切れてしまうのが傷だが他の利点を切るほどじゃあない。今だって、普段運動不足の自分が階段を駆け上がるのを苦痛に感じない。一段昇るごとに心が弾んで、気持ちが高ぶるくらいだ。これを一言お願いするだけで欠かさず配達してくれたカイトにはひたすら感謝するしかない。人とは罪なもので、彼等は僕らには勿体無いほどに健気だ。

「カイト！」

「マスター？」

彼は上がってきた僕に驚いたようだ。その気持ちは分からなくもない。

「修正プログラムが出来た。修理の準備もだいたい整った！今すぐメイコを抱えて下ろしてきてくれ」

「地下室までですか？」

「そうだ」

言って、いまだに眠るメイコが目に付いた。少し埃が積もってるように見える。どうやらカイトは一週間以上起動命令を送らなかったようだ。

「メイコには起動命令を流しておきなさい」

「わかりました」

早速コードを伸ばすカイトを見ながら、彼の手の動きが記憶より鈍い気がして、考えるより先に口が動いた。

「カイト、メイコに起動命令を送るのが嫌か？」

「いいえ、マスターの命令ですから」

そうだ、この子は僕の言葉には忠実なのだった。まだまだ彼らは言葉を額面通りにしか受け取れない。欲しい答えを得るにはこちらが気を使わなければならないということをすっかり忘れていた。

「自分で命令を送る判断をしなかった理由を聞いていいかい？」
「めーちゃんは思考回路のオーバーフローでフリーズしました。だけれどマスターはその根本的な原因の解決も、詳細なチェックもしないまま地下に篭ってしまいました」
「うん、そうだったね」
　だもそれは投げ出したわけではなく、一刻も早く解決策を見つけるために地下室に篭りたかったのだと言えばそれは言い訳になってしまうだろうか。
「その後、めーちゃんが自然起床した時に僕から事情を説明する間にもめーちゃんは二回、思考回路でオーバーフローしかけていました。だから、マスターが詳細なメンテナンスを施すまでめーちゃんは何度でも大規模なフリーズを起こしてしまうと思いました」
「なるほどね。でもメンテナンスに入るにあたって今のままじゃ都合が悪いから、頼むよ。君が心配するなら地下につれてきてから、ギリギリでいい」
「わかりました。そうします」
　ケーブルをしまうカイトを見てから、一足先に来た道を戻った。まだメンテナンスに必要な細々した準備が残ってる。

track 012 ［Einsatz］

黒い世界に細く走る一本の光。それがだんだん伸びて、広がって、視界になる。
「おはよう、メイコ」
マスターだ。
「おはようございます」
笑ってる。
「気分はどうだい？」
天井が白い。
「良いです」
ここは、カイトの部屋？それとも作業室？ああ、静かだからきっと作業室だわ。
「そうだろうね、メンテナンス明けだからね。わかる？」
自分の”中”に意識を集中させる。
「わかります。とても沢山の場所が、記憶と一致しません」
なんらかの寿命がある部品が全て付け替えられている。ほとんど全てのプログラムが修正されてる。記憶容量が増大してる。他にも、この様子だと私が気がつかない場所にまできっと手が入ってる。
自分が自分でなくなったみたいで落ち着かなくて、手当たりしだい記憶と現状を照らし合わせてる。追加された分の記憶容量が早くも過去と今の自分相違点リストで埋まりだした。
「メイコ、ここがどこかわかるかい？」
「作業所……ですよね？」
会話は並列処理でこなせる。
「そうだよ。じゃあ今日が何日かわかる？」
「××月×××日です」
また、笑った。
「体内時計はちゃんと動いていたみたいだね」

「そうですか……」
マスターは考え込む仕草をする。
「まだ馴染んでないのかな？」
「そうかもしれません。自分が自分じゃないみたいで、変な感じがします」
先ほどから走らせているプログラムはまだまだループを繰り返している。出力されてるリストは伸びていくばかり。
「暫く休んでいるといい。落ち着くまで起き上がっちゃ駄目だよ」
マスターが視界から消えて、少ししてからドアの閉まる音が聞こえた。
白い静寂が降って来た。

track 013 ［abmarsch］

アンドロイドも夢を見る。スリープモード中に一定の条件下で記憶をランダムに再生するのがそれである。夢見た記憶はノイズが混ぜられて全部綺麗には思い出せないような工夫までされてる。人間と同じようになるためには無駄なものが必要なのだとマスターは言っていた。

今日の夢では倒れる前のめーちゃんが笑ってる。昨日の夢でもそうだった。その前も。そんなにめーちゃんが恋しいのかと自問自答をしてみれば、僕にめーちゃんのいない記憶がほとんどないのだという結論に至った。僕の記憶のほとんどにめーちゃんがいるのに、めーちゃんの記憶を僕が占めてないのは不公平だと思う。

「カイト……カイト」

心地良いくらいの呼び声と共に肩が揺すられる。これは低級の起動命令だ。めーちゃんの笑顔と声にノイズが混じって、記憶再生機能がそれによる過負荷で落ちた。

「おはようございます、マスター」

「おはよう。メイコの目がさめたよ」

「本当ですか！」

思わず飛び起きてしまう。頭がぶつかりそうになったマスターが慌てて下がった。

「カイトは最近注意散漫になってきたね」

「すいません……」

謝ることはないのに、とマスターは笑った。

何故だ？アンドロイドは人に危害を与えかねない行動をとることはできない、それが正しい存在の仕方なのに。どうしてこの人は、注意散漫という重大な欠陥を許すのだ？

「わからないかい？」

「何を考えてたかわかったんですか？」

「何となくだけどね、何をどう受け取るかはまだわかるからね」
マスターまたやさしく笑う。
「それなら……僕に答えをください」
「それはできないよ」
どうして！
「……今も僕の言葉の理由がわからなかったね？」
頷く。
「それを君が自分で考えることが大切なんだ。その理由も含めて、よくよく考えてみるといい」
僕が、早速悩み始めて、受け取った情報の処理がおろそかになっているうちにマスターは部屋を出て行っていて、聞きたいことを山ほど見つけたのに、何一つ問いかけることはできなかった。
部屋を訪ねることも考えたけれど、窓の外は暗く、時計の針は真夜中を指していた。連鎖して、自分が起こされたことも思い出して、タスクリストを更新してから眠ることにした。
夢でまた、笑顔のめーちゃんに会えるのだろう。目が覚めたら、夢じゃないめーちゃんにも会えるに違いない。

track 014 ［with humor］

モニタの片隅に移るデジタル時計は午前3時を示していた。
「すっかり感覚がなくなってるな」
ただでさえ普段から外に出ないのに加えて、最近はあの激務だった。すっかり体内時計は狂ってる。
「あぁ、それでカイトは寝てたのか」
基本的に夜は眠るよう作ったのに悪いことをしてしまった。一方的に難題まで与えてしまったし。それが原因で眠れなくなって、体調を崩しはしないだろうか。アンドロイドの体調を心配するのがおかしくて自身を笑ってしまう。寝不足で体調が悪くなるようにも作ったのは紛れも無い自分ではないか。
ボーカロイドの設計理念と成長目標の1つは彼らが人間と同じように感じ、考え、選べるようになること。そのために思いついてできる限りのヒトの機能は盛り込んだ。休眠状況がその他の活動時間に影響を及ぼすシステムもそれらのうちの1つだ。夢を見せ、寝不足かどうかの判定を彼らの潜在意識として組み込んだ。もし、思いもよらなかった方向にこれらが作用すれば、カイトにもまた早期にメイコに施したようなメンテナンスが必要になるかもしれない。今回の件で2人のスペックに大幅な開きがでたから、それを埋めるにはある意味好都合かもしれないが、自分の体調はメイコの経過がまだ安心できないことを考えると時期的には非常に不味い。
ワークステーションにモニタリングさせてたメイコの目覚めて以降の思考ベクトル経過を確認する。人間で言う気分や機嫌を意識してこれをつくり、感情や性格にあたる部分のパラメータと相互干渉させて動きを制御している。現在は、酷く落ち込んで、ネガティブな方へ強く傾いている。これができるだけ良い位置で安定するまで、カイトには健康で居てほしい。メンテナンスのときに値を弄ることも考えたが、メイコは神経質なきらいがあるから、これをまた気に

病むのではと考えてやめた。しかしそれゆえに回復にもおそらく時間がかかるだろう。今以上に悪くならないとも限らない。そうすればカイトが心配したようにまた大掛かりなメンテナンスが必要になるかもしれない。これもまた、僕が辛くなりそうだ。たまに自分が人間であることを忘れてしまってるが、もう決して若くないし、やると言えばそれを諌めてくれる人はもういない。すぐに周りが見えなくなる気質は自覚しているが、彼らに何かあれば何時だって何処だって何だって何回だって、無茶をするに違いない。

「子供の世話をする親の気分って、こうなのかな」

独り、呟いた。

track 015 ［Grave］

また眠っていたようだ。マスターとの会話時間と時計に差がある。動くのが非常に億劫で、意識が不鮮明で、信号の伝達が平時と比べて大分遅い。

原因を探してタスクマネージャを開くと、まだ更新箇所のチェックタスクが動いていた。結果を出力させているファイルは眠っているうちに驚くほど肥え太っていた。

「もう、いいわ」

プログラムを止め、蓄積データを読まずにデリート。メモリもクリーナにかける。意識は多少はっきりしたが、気だるさはどこかにしつこく居座っている。これはなんだろう。

記憶ではメンテナンス明けというのはもっと爽やかな気分だったはず。作り物の私は疲れがあるならその原因には結構自覚的になるように作られていたはず。先ほどの蓄積データを読まずに消したことを少し後悔した。何か仕様が変わったに違いない。

マスターは私に何をしたのだろう。出来損ないだった私は、ちゃんとそうではなくなったのだろうか。あんなに時間を費やしてもらって、あんなに心配をかけさせて、私はやっとまともになれたのだろうか。

そうなれたとして、そうしたらこのけだるさはなんだろう。この正体の分からない不快感は何？メンテナンス不良？マスターに限ってそんなことはあるはず無い。デバッグプログラムにも異常はない。

ウイルスにかかった？　――そうではなかった。

身体と意識のリンクが正常にとれていない？　――そうではなかった。

起動モードに齟齬がある？　――そうではなかった。

今、私のどうなってるんだろう。私の身体が思い通りにならない、私が私でないような。

そもそも、私ってなに？　――――。
警告周波信号が出された。疲労負荷が規定値に達したという。そのために一定時間、強制的に休眠させるとも。
たったこれだけしか動かなかったのに、それも頭しか、それなのにまた。私は、また……。

track 016 ［addolorato］

何故、めーちゃんがあの時飛び出して行ったのか。
可能性を見つけたことと、わかったことは全く別物で。
何故、マスターはあのような言葉を投げたのか。
僕に、機械に、マスターは何を求めているのだろう。
何故、僕はこんなにもわからないのだろう。
同じ作りのめーちゃんが考えることすら。思うことすら。感じたことすら。
人間のマスターには僕の考えが筒抜けであったのに。

僕とめーちゃんは何が違うんだろう。リストアップされたのは設定された性別、性格、外見、感受性、細々とした部品の色々。めーちゃんは最近メンテナンスを受けたから、システムのバージョン。
そこまでは、マスターだって、めーちゃんだって、僕にだってわかる。これが問題の原因でないことも。じゃあ、こうしてわからない事が原因なのは明白だ。そしてめーちゃんや、マスターがわからないこと、それは経験の蓄積に関すること。この部分はあえてブラックボックス化されていて、マスターなら解析することはできるだろうけれど、そのために必要な時間を加味すれば、その間にも僕たちは学習を続けているから解析結果は意味がなくなってしまうのだという。
ただし、ここで中身の差はあまり問題ではない、問題にはできない。そうすると、僕がめーちゃんのことをわかるようになるためには、もっと経験が必要なのだ。
マスターの時間にして四ヶ月、僕とめーちゃんの間にある広がっていく隔たり。埋められない差。　でも、僕が生まれた時のめーちゃんは、その時既に心配性で、面倒見の良い僕の知ってるめーちゃんとしてある程度完成されてたように思うのだ。しかし、生ま

れて四ヶ月以上経つ僕自身にはそのような完成された特性がない。
僕が生まれる前の四ヶ月、何があったのだろう。その期間の何が、僕とめーちゃんを隔てているのだろう。
それはマスターやめーちゃんに問い掛けて良いのだろうか。
ああ、やっぱり僕には何もわかりはしないのだ。

track 017 [breit gestrichen]

……何時になったら私はもう一度正常に動作できるようになるのだろうか。

強制休眠とそれに伴うデフラグやクリーンアップで今度の目覚めは先よりも爽やかであったのに、起こそうとすると体はこんなに重たい。しかし動けばそれの重みはずれた。マスターが私に突っ伏して寝ていたのだ。

「マスター。起きてください」

肩を軽く叩く。いつもはこの程度では起きないのだが、今日は違った。きっと寝心地が悪いのだろう。

「ああ、メイコ。目覚めたのか」

マスターにとってはきっと何気ない一言なのだろうが、私にはその一言で様々なものが込み上げてきた。

「……マスター、私、直ってないです」

沢山の溢れ出した言葉から選んで、選んで、やっと言えた一言だった。

「何故そう思うんだい」

こういう状況でのマスターは、あまりにも科学者で、酷く残酷だと感じる。

「さっきも、過負荷で強制休眠になって眠ってたんです」

まただ、また思考速度が低下してる、ノイズが混じってきて物が考えられなくなっている。

「今もまたノイズまじりで……」

マスターが私をじっと見つめていることだけ感じながら、また過負荷で落ちるのではないかという不安が募る。

「僕なんてどこでもしょっちゅう寝てるよ」

「え？」

その一言で私の雑音は全部削がれた。

「僕だって、集中したら周りが見えなくなってよくぶつかるし、物はすぐに散らかして場所がわからなくなる。寝起きの時間も不規則で大抵寝不足か寝すぎのどっちかで、食事をろくに取ろうとしないから貧血になったりしてる。今だってメイコの様子を見に来たはずなのに起きるのが待てなくて居眠りしていた。メイコがそうだというなら僕だってどうしようもない欠陥品だ」
「マスターはそんなことないです！」
「じゃあメイコだってそんなことないんだ。それでいいんだよ」
マスターの言葉が上手く受け容れられない。今の私でいい？私は機械なのに、正確であらねばならないのに。
「私は、アンドロイドなのに」
「違う、君はボーカロイドだ」
そうだ、私の中身はボーカロイドだ。
「君の目的は何だったかな？」
「歌うこと」
よくできました、とマスターは私の頭を撫でて表現した。
私は未だにマスターの言葉の真意がわからずにいた。短い問い掛けには答えられても、問い掛けの理由がわからなかった。色んな言葉が検索されて、色んな思考がめぐるけど、現在の負荷は適正範囲で収まっている。
「僕は君が君の歌を歌うのを期待してるんだ」
「ねえメイコ、前のあの曲、もう一回歌ってみないかい？」

track 018 ［misterioso］

メイコはずっと緊張していた。人間ならばこれをトラウマと言うのかもしれない。何度シミュレーションを行っても前の二の舞で、メイコはいますぐにでも止めたいと言いたいのだが、マスターの提案に一度頷いてしまった今、それは彼女自身が許さなかった。それでも、マスターはメイコの気持ちを尊重して、止めたいといえばきっと止めてくれる。そんな確信はメイコを甘えさせようとしていた。スタジオに入り、マイクの前に立った今でも、メイコは葛藤していた。

「準備は良いかい？こっちはできたよ」

「大丈夫です」

言いながらもなお気分は曇っているが。

「上手く歌おうと頑張らなくて良いよ。考えないで、思うまま、歌ってごらん」

マスターは酷く抽象的な事を言う。どうして良いかわからなくて、とりあえず思考バスを絞った。

「インカムの状態は？」

「問題ありません」

「アイ・ディスプレイは？」

「問題ありません」

「何か、調整前と比べて違和感のあるところは？」

「ありません」

「それじゃあ、初めよう」

記憶に新しいイントロはメイコを憂鬱な気持ちにさせたが、絞られた思考バスでは歌うこと以外が入り込む余地はなかった。

口を開いて、喉を震わせ、歌う。

これが、メイコの目的、存在意義、全ての理由。

ヘッドホンからの入力が途切れた。ガラス越しにマスターを見る、一番新しい記憶とは裏腹に彼の人は笑っていた。
「どうでしたか？」
「よかったよ。自分で出力データを見てごらん」
思考バスを解放してデータを参照する。スコアはあの時とは目に見えて違っていた。
「これで、良いのですか？」
「ああ、十分だ」
「でも、前よりずっと下手だと思います」
「それが、今の君なんだよ、メイコ」
「下手なのが、私？」
「これからもっと上手くなる」
「これが、私……」
「そう。それが、君だ」

track 019 ［passionato］

めーちゃんは突然元気になった。これまでに戻ったというのは不自然なくらい機嫌がよく、躁状態のようにさえ見える。
それぞれの個室にいるときは耳をすませば大抵隣から歌声が聞こえるし、家事をしている時も鼻歌が絶えない。
めーちゃんが元気になったことは喜ぶべきだし、ボーカロイドが歌うのだって当然のこと。だ。しかしカイトはそれを素直に受け入れられないでいる。
それは同じボーカロイドとしてカイトがメイコの様子に違和感を抱えているからに他ならない。カイトから観測される感情ベクトルの変化はあまりに非線形だし、いくらボーカロイドが歌うといったって、それは情動、思考、感受性の高度化の動機付けであり、それを阻害しかねないほど過剰に嗜好の刷り込みが行われることはない。
すくなくともカイトにはなかった。メイコと自分が殆ど同じ存在、そう意識すれはするほど違和感は肥大し、マスターへの疑念は許されている限界をマークしていた。

そのことに自覚的になると、カイトは一度強制的に思考を落とした。思考キャッシュのクリアだ。
一度煮詰まるとキャッシュに同類のデータばかりが蓄えられ、また思考中もデータはキャッシュから優先的に読み込むよう設定されていることをカイトは理解し、そしてそれを思い出せる程度には冷静であった。
ともすればメイコのようにオーバーフローを起こしてフリーズしていただろうとも思い至り、少しぞっとした。いつまで経っても拉致のあかない自分にやや苛立ちもした。
しかし、マスターからの課題が分からない彼にはこの問題を解決す

る力はないのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2702f/

君の歌は僕の歌

2010年10月28日23時35分発行